



経済学部で身につけるべき技術

著者	白井 洸志
雑誌名	エコノフォーラム
号	26
ページ	68-68
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028466

2019年
7月9日
火曜日

白井 洸志 准教授 (数理経済学)

経済学部で身につけるべき技術

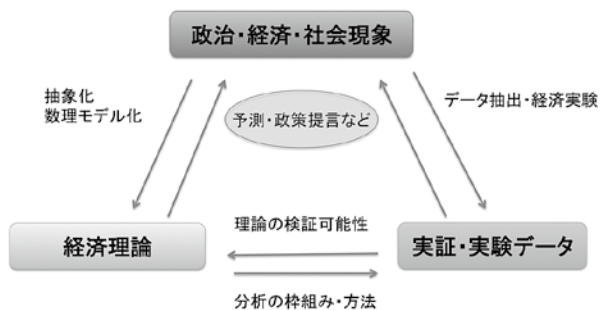
経済学者に「経済学部とは何を勉強するところか」と聞いた場合、答えはおそらく十人十色以上あり、何が肝心なものかハッキリしないかもしれない。これは経済学の分析対象の多様さによるところが大きく、一口に経済学者とは言っても、ある人は労働問題を、ある人は環境問題を、またある人は経済学の応用数学としての側面を眺めて暮らしており、各々経済学への見方も違ってくる。

しかし、経済学そのものは「色々な分析対象があるので経済学の理論体系も様々」という構造にはなっておらず、むしろ分析対象の多様性にも関わらず、多くの分野に共通の考え方や分析ツールを持つのが特徴と云ってよい。すると、個々の分析対象に特別な事情を一旦忘れて、経済学部で身につけるべき技能とは何かを一般論として説明できそうである。今年度のチャペル講話で目指したのはこの点であり、その要旨は以下のとおり。

(図1) は経済分析一般のプロセス・視点を私なりにイメージしたも

のであり、技術的な面から言えば、経済学部で身につけるべき技能はこの絵を完成させる能力に集約されると考えている。

経済分析の第一歩は、分析対象を持つ論理的構造のうち特にカギとな



(図1) 経済分析の基本的視座について、そのイメージ

るものを見極め、それを簡潔な数理モデルで記述することである。「経済と経済学の基礎」を含む理論経済学で登場する「経済モデル」というのはまさにそれであり、その解析を通じて経済現象に対する予測あるいは政策提言が与えられる。当面必要な分析手法はミクロ経済学とマクロ経済学の二つにほぼ集約されているので、それらを集中して学ばれたい。

一方、計算機の進化に伴って、実行可能なデータ分析の幅が飛躍的に広がり、その重要性が増している。数値的な分析を通じて経済予測・政策提言はもちろん、理論分析の妥当性を検証する役割もある。データ分析の技術は統計学や計量経済学で提供されるが、それらは経済理論とセットで初めて用をなす点に要注意。しばしば誤解されるが、それがどれほど詳細かつ膨大なものであれ、データそれ単体で言及できることは極めて少なく、実証分析の結果は分析者が前提とした経済モデルに大きく依存する。つまり、(図1)

補完的な関係にあり、その繋がりを意識して学ぶと得るものが大きいだろう。

上記の科目群を通じて分析ツールを備えれば、いよいよ各自関心のある社会現象について研究出来る。応用範囲として労働、環境、開発、貿易、財政、金融、医療くらいは即座に思いつくし、これが全てとは到底思えない。本学の経済学部でも相当数の応用科目群が開講されているが、ここでは分析ツールを応用して実際に(図1)を描く作業をすると考えればよい。

最後に(しかし最小にはなく)歴史・宗教および言語科目の重要性を強調しておく。社会現象はあくまでも人間(又はその集団)の行動とその結果であり、背景にある人間についての理解が不可欠である。技術的な側面から(図1)を完成させる能力を支えるのが理論・応用経済学科目とすると、より「コク」のある絵を描けるか否か、少なくともその成否がこれらの科目群にかかって